

祇園精舎の鐘

村田昇

平曲は源平の斗争史、やがて平家の滅亡を詩った叙事詩である。詩は美を以て感動させる。美は宇宙自然のいのちの秩序への調和である。涅槃経の諸行無常・是生滅法・生滅タ己・寂滅為楽の四句偈は、自然の秩序である。これを日本の抒情は、いろはにほへとちりぬるをわかよたれそつねならむうろのおくやまけふこえてあさきゆめみしゑひもせす、とかなしみ、又、解脱した。平家物語巻一の初頭に、この四句偈を巧に旋律に乗せて、

祇園精舎の鐘の聲、諸行無常の響あり、沙羅双樹の花の色、盛者必衰の理を顯す。驕れる者は久しからず、只春の夜の夢の如し、猛き者は必ず衰ふ。風の前に塵に同じ。

と謡ふ叙事詩を、盲僧が琵琶で合奏する平曲ともいはれるかなしい音楽となっている。人間は死すべき運命をもって生きるというかなしい矛盾である。

太政大臣平清盛を大將軍とする聖主安徳天皇を加へた一大豪族が盡く西海の辺土に運命を共にして滅亡した歴史的現実は、日本民族史の始めて経験する慟天哭地のかなしみである。いのちの根元は生死一如であると涅槃経は偈している。平家一門の運命も然りであ

る。そのかなしみと調和して、土の底の蟲の如く人間のドン底に生きて人間のドン底のかなしみをつぶさに聞く天才である盲僧が、諸樂器中最も深いかなしみの音をたてる琵琶を弾き奏でる音楽が平曲である。平曲はインドの声明を元にした緩かな低音で、聞く者を、かなしみの極みに誘ひ盡くす。このかなしみの極地に待ち給ふのが、大悲大慈の如来であると、浄土教が導いた。平曲は大悲哀史詩であり且佛教史詩である。

祇園とは、中インド舎衛国の長者スダッタは、ハシノク王の太子祇樹より、祇樹給孤獨園と呼ばれた土地を、價の金を吝まず出して購ひ、ここに釈尊の説法堂宇を建てて献上し、又、貧しき人・孤獨な人々に食を給したので祇樹給孤獨園と名づけた。(日本各地の祇園社はインド。祇園精舎の守護神牛頭元王を祭祀する。) 釈尊はここに住してから二十五年間インド各地を遊行し説法した。阿弥陀經もここで説かれたのである。精舎は寺。朝鮮語 *Fi gal* の訛、この精舎に無常堂あり、四面の廊に白骨非常の相を書く。病僧はこれに入れ、諸の非常の相を見せ、堂の四隅に頰梨の鐘四あり、形は腰鼓の如く、病僧命終の時、諸行無常の偈を唱る。病僧之を聞き苦惱

を除き、清涼の樂を得て三禪に入る如くに往生す。(祇園圖繪下)

「往生要集」厭離穢土無常の處に、「大經」の偈に云はく、

諸行は無常なり。是生滅の法なり。

生滅タシ己つて 寂滅の樂となり

祇園寺無常堂の四の角に、頗梨の鐘有つて、

鐘の音の中に、亦此の偈を説く。病める僧、

音を聞いて、苦惱即ち除けり、清涼の樂を得、三禪に入るが如く

にして、淨土に生れんとすと。況や復た雪山大士は、全身を捨て

此偈を得たりといふ。

補注 今の日本の寺で鐘樓に釣つて檀木で鳴らす梵鐘は、今のイン

ドには無い。昔からして無かつたと思はれる。頗梨は水精である。

「形腰鼓の如し」「偈を鳴る」とあることから、風鈴の如き小さき

器と想像される。「音を聞いて、三禪に入るが如く」とあることから

心耳に聞こえてくるのである。三禪とは、色界の第三禪天、深妙の

禪定より心身の快樂を生ず。

大經とは、大般涅槃經。此偈とは大經の四句經・雪山偈をいう。雪

山偈と名づくる所以は、源為憲(寛弘八年没)の三宝絵詞に

昔独の人有て雪山に住みき、名付て雪山童子と云ふ。藥を食ひ、

菓の子を取て心を閑かにし道を行ふ。帝釈星を見て思はく、魚の

子は多かれど魚と成るは少し。菴羅の花は滋けれども菓子をつぶ

は希なり。人も又如し是し。心を発す物は多かれど佛に成るは希

らなり。惣て諸の菩提心は淨土に経れど動き安く、苦しびを恐

て励み難き事水の内の月き波に隨て動き安く、鏡ひを着たる軍さ

の戦かふに臨みて恐て逃ぐるが如し。此の人の心をも行きて心ろ

見て可知しと念ふ。其の時に佛世に不_レ伊坐_二ざりしかば、雪山童

子普く大乘經を求むるに不能す。諸行无常是生滅法と云ふ音る風

のかに聞こゆ。驚きて見れば、人も無し。羅刹近く立てり。その

形猛けく恐そろしくして、頭の髪は焰ほの如く、口齒は劍の如し

目を瞞からかして普く四方を見廻らす。此れを見れども不_レ驚か

ずして偏へに聞きつる事をのみ悦び奇ぶ事驗へば年経て母を別れ

たる小牛の風のかに母の音を聞ならむが如し。「此の事は誰か云

つるぞ。必ず残の辭は有る可。」と云て、普く尋ね求るに人も无

ければ、若し此鬼の云つるか疑へども、末多「世に有らじ」と

念ふ。此の身を見れば罪の報の形なり。此の偈を聞ば佛の説給る

詞はなり。加々留鬼にの口より加々留偈を云ひ不_レ可_レ出と思へど

も又異と人と无ければ、「苦此の事は汝が云つるか。」と問ば、羅

刹答ふ。「我に物な云そ、物不_レ食して多の日を経ぬれば、飢え

疲れて、物の於毛保衣須。既に太者事に云へるならむ、我が遷し

心に知れる事にも有らじ」と答ふ。人又云ふ、「我れ半偈を聞き

つるより半なる月を見るが如く、半なる玉を得たる如し。猶汝が

云へるならむ。願は残の辭を説き畢てよ。」と云へば、鬼の云く

「汝は自来悟り有れば不_レ聞とも恨み不_レ有し。吾れは今飢に被_レ

迫れたれば、物可_レ云き力も無し。惣て多し。物な云ひそ。」

と云ふ。人猶問ふ。「物食ひてば説きてむか」と問へば、鬼「佐

良波云ひこもしてなむ。」と答ふ。悦て「何に物をか食ふ。」と

問へば、鬼答ふ。「汝更不_レ可_レ問す。聞かば必ず恐れを成してむ。

聞くとも又可_レ求き物にも不_レ有らず。」と云ふ。人迫て問ふ。猶

其の物とだに云へ、心見にも求見む。」と云へば、鬼云ふ。「吾

れは只人の温かなる肉^{ししむ}を啗ひ、人の温かなる血を呑むと空を飛
 て普く求め、世に満て人多かれど、各の守り有れば、心に任せて
 難^し殺し。」と云ふ。其の時に雪山童子の思はく、「我れ今日ふ身
 を捨て此の偈を聞き畢てむ。」と思て、「汝か食物袋に有り、外
 かに不可求す。我が身未死ねば、其肉し温かならむ、我身未寒ね
 ば其の血温かならむ、早く残の偈を説け、即此の身を與へむ。」
 と云ふ。鬼咲ひて云く、「誰か汝が事を實ととは可^し憑き。聞て
 逃ていなば誰れを証人としてか糺さむとする。」と云ふ。雪山童
 子の云ふ、「此の身は後に遂に死なむとす、一つの功德をも得
 まじ、今日法の為にきたなく穢がらはしき身を捨て、後の後と
 成むは淨く妙なる身を可^し得し。土の器を捨て宝の器のに替ふる
 が如くにせむとする也。梵王・帝釈・四大天王・十方の諸佛菩薩
 を皆証人と為^なむ。我れ更に不^し偽らじ。」と云へば、鬼「若し云ふ
 が如くに、實とならば説かむ。」と云ふ。雪山童子大きに悦びて
 身に着たる鹿の皮の衣をも脱ぎて、法の座に敷きて、手に又ぎへ
 地に跪まつて、「但し願くは我が為に殊の偈を説き給へ。」と
 云つ、心を致して深く敬まふ。鬼の云ふ。「生滅々已、寂滅為
 樂となむ云ふ」と。此の時に是を聞悦び貴ぶる事无^し限し。「後
 の世に不^し忘じ。」とて数た度び云ひ返して深く其の心に染む。
 「悦ぶ所は此の佛説き給へる空しき教を悟りぬる事を、歎く所は
 我れ一人のみ聞きて人の為に不^し傳成りぬる事を。」と思ひて、
 石の上へ、壁の上へ、道の辺の諸の木毎に此偈を書き付く。「願
 は後に来らむ人必ず此の文を見よ。」と云ひて、即高き木に上

て羅刹の前に落つ。未だ地に不^し至ぬ程に羅刹俄かに帝釈の形に
 成て其身を受けつ。平かなる所に居えて敬ひ拜がみて云ふ、「我
 れ暫く如來の偈を借て心見に菩薩の心を惱しつ。願は此の罪を免
 して後に必ず渡し濟へ。」と云ふ。天人来て「善哉々々眞に是善
 提。」と唱ふ。半偈の為に身を投しに十二劫の生死の罪を超にき
 昔の雪山童子は今の釈迦如來也。炎経に見たり。

で判かる。炎経とは涅槃經聖行品である。これは本生譚 JATAKA
 と稱し、釈迦の前生の菩薩行を書いた説話であつて、インドでは
 パアルフット Bharhut サンチー Sanchi アマラヴァチ
 Amaravati アヂヤンタ Ajanta 等に遺り、デヤクではボロゲドル
 Borobudur に、シナでは、中亜猪掘品として龍門に、日本では
 法隆寺の推古帝の内持佛として玉蟲厨子の扉壁に、密陀僧で画か
 れている。ミユダーセン Mirdaeng は、密陀僧と宛字し、酸化鉛を
 荏(紫蘇油)の油を溶した絵具で、ペルシャ語である。玉蟲厨子の
 油絵は、西洋の油絵よりも七百年も早い作品である。偈とは、佛家
 の詩で、普通五字又は七字を一句とする。雪山偈の意味は、もろも
 ろのつくられたものは無常である。生じては滅びる性質のものであ
 る。生じては滅びる。その静まるることが安樂である。いろは歌は
 この四句を詠んだものである。色は句へど散りぬるを(諸行無常)
 わが世たれど常ならむ(是生滅法一有為の奥山けふ越えて(生滅々
 已)浅き夢みじ酔ひもせず(寂滅為樂)である。七五四句の今様い
 ろは歌は、弘法大師の作の和讃であること、江談・繹日本紀・倭片
 假名反切義解に載せ、高野辰之氏が賛成しているが、黒川春村の「
 碩鼠漫筆」大矢透氏の「音図及手習歌詞考」には否定している。四

句偈のことは、往生要集を元として榮華物語音楽卷―梁鹿秘抄・澄憲表白集・転法輪抄にも出ている。源氏物語の薫源氏が、宇治の寵居で

雪のかきくらし降る日……すそれ巻きあげて見たまへば、むかひの寺の鐘の声、枕をそばだてて、けふも暮れぬ、と、かすかなるを聞きて、

おくれじと空ゆく月をしたふかなへひにすむべきこの世ならねば――

恋ひわびて死ぬるくすりのゆかしきに雪の山にやあとをけなまし

なかばなる偈教へむおにもかな、ことつけて身を投げむとおぼすぞ、心きたなきひじり心なりける。(角総)

とあるのは、雪山偈を引いているのである。

ここには白氏文集の遺愛寺鏡歌枕聴や拾遺集の「山寺の入相の鐘の声ごとに今日も暮れぬと聞くぞ悲しき」も引きとりそろへて諸行無常の鐘の哀調を撞いている。王朝文化の吊鐘であつて是は中世來迎のひびきである。雪山童子は求道の為に身を投じた。薫は恋に苦んで身を投げたいと思ふ。「心きたなし」といふ所以である。二千有余年前インドに撞かれたこの梵鐘の諸行無常の余韻は、シナへ日本へ、あらゆる文化、すべての階層に、かなし、あはれ、はかな、さみし等、生死にかかわる深い実存心情を十方響流とふるわせ、「無常文芸」と名づけられる潑標となつて今に至りついでいる。

宇治十帖において薫が、雪山童子の大勇猛心と比べて、自己の愛欲煩惱のきたなきさを懺悔した處に、王朝に訣別せんとする中世の閑

きがある。紫式部は中世の到来を靈覺し、予言してゐるのであると思はれる。その予言は適中して承平の將門・天慶の純之、保元・平治から平家物語の劈頭に打たれる祇園の鐘に共鳴して行く。この諸行無常のかなしみを己のかなしみと感動した盲僧生佛の琵琶の音が平曲である。恰も信長が桶狭間出陣に際し、「幸若無の人間五十年下天の内をくらふれば夢幻の如くなり」を誦ったことが、中世と訣別する近世の宣言であつたと同類である。雪山偈を實行して眞しぐらに火宅無常の世を生き貫いたのが、中世僧侶の文芸であつた。雪舟も心敬も元祿も芭蕉も雪山偈の崇高を伝えているのである。

沙羅雙樹の花の色 沙羅は梵語。高遠又は堅固と訳す。インドに産する樹。その樹高くし十許丈に及び、枝幹は髀に類して皮青白く、葉は楕円形にして光潤なり。淡黄色の小花を開く。高遠とは其樹の聳えて遠方より見ゆるをいひ、堅固とは冬夏不改なるをいふ。釈迦ムニ佛、クシナ国バタイ河の西の邊バラ林下の七宝の牀に臥し、頭北面西右脇にして涅槃に入る。其七宝の牀は微妙の瓔珞を以て莊嚴し沙羅樹は其四方に各一雙、總じて八株あり。故に其樹を雙樹又雙林といふ。佛の涅槃に入れる時、其樹の東西に二雙合して一樹となり南北に二雙合して一樹となり、宝林に重覆して佛を蓋ひ、悉く白き色に變じて白鶴の如し。故に雙樹は鶴林ともいふ。涅槃経後分上等に詳し。(據御橋惠言平家物語畧解)

ここでは沙羅雙樹の花で、盛者必衰の哲理を象徴しているのであるが、この花は又諸の花を象徴している。これは平家物語の詩の普遍性である。これを平家物語の中に探ってみると左の如くである。

来る年の春ごとに、見る人櫻町とぞ申しける。櫻は咲いて七箇日に散るを、名残を惜しみ、天照大神に祈り申されければにや、三七日まで名残ありけり。……花も心ありければ、二十日の齡を保ちけり。(巻一我身の榮花)

綺羅充滿して堂上花の如し。(八)

萌出づるも枯るゝも同じ野辺の草何れか秋にあはで果つべき。(巻一妓王)

卷一妓王)

娑婆の榮花は夢の夢、楽しみ榮えて何かせん。……一旦の榮花に誇つて、後世を知らざらん事の悲しさに。(全)

花香を供へて、他念なく願ふ。(全)

櫻花賀茂の川風うらむなよ散るをばえこそ留めざりけれ。(巻一鹿の谷)

枯れたる草木も忽ちに花さき実なるとこそ聞け。(巻二卒都婆流し)

三月中の六日なれば花は未だ名残あり。故郷の花の言ふ世なりせば如何に昔の事は問はまし。(巻三少将都還り)

咲き出づる花の都をふりすてて風福原の未ぞあやふき。(巻五都還)

埋木の花咲くこともなかりしに身のなる果ぞ悲しかりける。(巻四空の御最後)

平かに花咲く宿も年ふれば西に傾く月とこそ見れ。(巻七平家山門への連署)

ささなみや古き都は荒れにしをむかしながらの山櫻花。(巻七忠度の都落)

祇園精舎の鐘

哀れなり老木若木も山櫻おくれ先だち花は残らじ。(巻七青山の沙汰)

行き暮れて木の下陰を宿とせば花や今宵の主ならまし。(巻九忠度最後)

如何にせん都の春も惜しけれど馴れしあつまの花や散るらん。(巻十海道下り)

遠山の花は残んの雪か見え。(全)

悲しきかな、無常の春の風、忽に華の御姿を散らし、痛ましきかな、分段の荒き波、玉体を沈め奉る。(巻十一先帝の御入水)

花は色々匂へども、主と頼む人もなく。(灌頂卷)花橘の風なつかしく、軒近く薫りけるに、……郭公花たちばなの香をとめて鳴くは昔の人や悲しき……野寺の鐘の入相の音すこく……無常は、

春の花、風に随へて散り易く……昭陽殿に花を翫んじ朝には、風來つて薫を散らし。……遠山にかゝる白雲は、散りにし花の形見なり。中島の松にかゝれる藤波の、裏紫に咲ける色、青葉交りの

遅桜、初花よりも珍らしく、岸の山吹咲き乱れ、八重立つ雲の絶え間より……池水に汀の桜散り布きて浪の花こそ盛なりけれ……

花篋臂にかけ、岩躑躅取具して持たせ給ひて待ふ……内侍の尼、参りつつ、花篋をば賜はりけり。……南殿の桜に心を留めて、日を暮し……以上灌頂卷)

これは平家物語にはのつていないが、作者不明のへ生れては死ぬことわりを示すてか 沙羅の木の花うつくしきかる。へ花さきて夕にはちる さらの木の 花のさかりをみればかなしもとうたわれてい

る。大阪の中島公園に沙羅の木がある。

華族英雄といはれ羨望され驕りを極めた平清盛の一門が、初巻に語れた雪山山偈の哲理、大宇宙の法に違はず、二十年の後、風に落ち散る花の如く滅亡し、やがて解脱して西方十万億土の浄土に往生した解脱詩が平家物語である。積善の家には余慶あり、積不善の家には余殃あり。結巻の灌頂巻において清盛の娘建礼門院は、父祖並に一門の宿業を一身に背負うて、一生涯六道を輪廻したが、終には大悲彌陀如来の光明に撰取され解脱し西方浄土に往生した。観經の韋提希夫人の還相である。宇治十帖の浮舟の後生譚である。平家物語は源氏物語の子であるということ立証することである。浮舟の生涯である。東洋の誇り演劇の聖典観經の王会城の悲劇(私は「解脱劇」という)の復活である。落花の美はころびの美の詩人であり妙好人である建礼門院は、女性史上の劃期的人物である。建礼門院の解脱的叙事詩を、歌舞二曲の行動に仕組んだのが能の大原御幸である。後白河院が王朝を代表して王朝美の最後の美女建礼門院を中世に向つて葬送する劇である。

灌頂巻には、花についての語りが多い。ゲータは、人は死に際が最も美しいといっている。灌頂巻は、王朝貴族文化の花道、平家一門の花道・建礼門院徳子の花道であったから、花が多くカタられていのである。

驕れる人も久しからず……風の前の塵に同じ。永観律師の「往生講式」には、「朝開_ニ榮華_一、暮隨_ニ無常_一之風、宵翫_ニ明月_一、曙_ニ別離_一之雲、一生是風前之燭、萬事皆「春夜夢」による。三鈷寺拘留如来縁起に「朝に榮花を開くものも、暮には無常の風にしたがひ宵に朗月を翫ぶ輩も、曉には別離の雲に隠る、奢る者久からず、春の夜

の夢のごとし、猛き心も経には亡ず。風の前の塵に同じ。」観普賢經に「身為_ニ機關主_一、如_ニ塵隨_一風転_ニ古今集_ハ雜歌に、「風のうへにありかさだめぬ塵の身は行へもしらずなりぬべくなり。

本朝文粹_一敦光朝臣白山上人縁起に、「嗟乎十惡五逆者風前塵、妄想顛倒者空中之花」

ただ春の夜の夢の如し。「涅槃經」・「大円覚經」に、「生死無常猶如昨夢」、「唯識論」に、未得真覺常處夢中故佛說解生死長夜とある。白氏文集卷十二に、「送_ニ劉道士_一迦_ニ天台_一人生同_ニ大夢_一夢与_レ覺詭分、況此夢必夢、悠哉何足」云とある。源氏物語の最終巻は夢の浮橋である。四辻善成の「河海抄」には、「浮橋は生死のおこり煩惱の根元也。夢とは世間出世の法、皆如幻如夢なりといふ心也」といふ。源氏物語の夢の浮橋が、歴史的現実となった平家哀史を語る平家物語の序章の「驕れる者久しからず、只春の夜の夢の如し」とあることの反歌として、定家の新古今歌「春の夜の夢の浮橋とだえして峯にわかるる夢の浮橋」であるという思考もありうると思つている。平家は文治元年三月二十四日に亡んだが、彼らが運んだ源氏物語のみやびは、近世文芸の復興まで中世という幽玄な長夜の夢をみつづけていった。

諸行無常の理において、人間の最も畏れ悲しみ不安であるものは死である。涅槃經四句偈の歴史的事実を叙事詩として語つたのが平家物語である。四句偈の寂滅為樂は、死の不安が寂滅した安定涅槃を説いている。故に平家物語は佛敎詩である。説敎節の様式である。

補 法然、涅槃和讃、沙羅双樹ノ風ノ声、会者定離ヲ調フナリ、祇園ノ鐘モ今更ニ諸行無常ト響カセリ、無常ノ声ヲ思フニソ実ニ

是生滅法ナル、佛ハ生滅滅己シテ、寂滅己樂ヲ證シ給フ（日本歌謡集成卷四 三六）

死刑の全く無かつた平安朝四百年が、保元・平治・平家という軍記文芸の内容となつてゐる時代になると、刑死・憤死・惨死・戦死・自刃・入水等不自然な死が続き、僧に依り仏縁を結んで念佛往生している。

諸行無常是法滅法生滅々己寂滅為樂と聞ゆなれ。やまひの僧この鐘の音を聞きて、皆くるしみうせ、あるひは浄土に生るるなり。

迦葉尊者の石の室、祇園精舎の鐘の聲、醍醐の山には仏法僧、鷄足山には法の聲。（梁塵秘抄）

壯人老少不定なりとて皆別れぬ。老者生者必ず滅して残らず。諸行無常是生滅法、頗梨の鐘、耳に盈つ。（澄憲表白集上安元二年九月天王寺御逆修旨趣）

諸行無常是生滅法、頗梨の鐘耳に盈つ。今日明日を知らず、死するを死らず、雪山の寒苦鳥吾に在り、唯まさに一心に念佛を修すべし。自他早く極楽國に詣づ（転法輪抄三）

と寂滅の歡声を抒情してゐる往生要集等の佛教が人間は死ぬべきであると自覚させた。平家物語の滅亡という歴史的事実は、その実感を深めた。僧侶は平家滅亡を、こよなき教材として大衆の嗜好に随うて叙事詩に作り、琵琶に奏でた。その佛教は法然の浄土教であつた。平曲が日本人の詩心と靈性を深めたことは、はかり知れぬものがある。この靈性を自覚したのは、秋の裏の枯葉の地の底に、うめきうつたえる虫の声であつた。日の目もあたらぬみぢめな、最低限の衣食住のみがゆるさされてゐる貧賤な群萌であつた。

祇園精舎の鐘

佛法の苦諦、諸行無常の悲しみを、体験してゐる庶民であつた。この悲苦から、集諦・滅諦・を經・是生滅法・生滅々己を歴して、道諦・寂滅已樂と往生・解脱・歡喜・樂觀に転入することが佛道である。祇園精舎の鐘の聲は、往生要集に影響し、平家琵琶に伝はり謂々と、中世から近世へと限りなく十方に伝はる。その中にいろはうたが雜つてゐる。この手習詞は作者もまだ定説なきままに、西洋思想に阻まれつつも、尚佛教思想の普及に強い力をもつてゐるのである。無常の根本義を、おのが口語のアルハベツトとした民族は、日本人だけである。佛教の無常思想の象徴として東洋文化の發展を念願する者の、生活信条とすべき詩情である。人間の生は死によつて絶対的価値が定る。この死を寂滅為樂・涅槃という。

かく自覚し信じて死する者の死は、大歡喜・大安慰に帰命したのである。宇宙の大音響・大旋律に帰しいのちが宇宙と共に律動してゐるのである。これが祇園精舎の鐘の響である。

ほろびのいのちと、撰いの大悲のいのちの調和したひびきである。慘憺忍苦に生きる人にも、必ず死の涅槃は恵まれてゐる。喜びなき不幸の者にこそ、涅槃の鐘は楽しく聞える。末期の近づくほろびのいのちは、雄弁になる。これが平曲に代表された中世詩の旋律である。靈は詩的情操に鼓吹されて創作に向つて努力する。（ポードレル）自分の靈の中に音楽をもたない人は、眞の詩人には決してなれない。（コウルリツ）

果樹に種熟脱がある如く、涅槃経の四句偈は、生れて死ぬる人間の一期の自然の道理を約結してゐる。

寂滅為樂寂滅為樂とは、厭離穢土と欣求浄土、煩惱と菩提・醜と美

・現実と超現実の調和、死の花・岩の花・花開く死・生死一如・よろこびの死である。

古典で最も多くの悲劇死を語ったものは、平曲である。悲劇死とは、熟せずして落命する中天・戦死等である。このいのちを救滅為樂に引導しているのは、法然浄土教である。だから平曲には、源氏物語のみやびなあはれがまだ流れている。みやびの反対の意志的男性的田園美のひなびの現れたのは、武士道の発展によるもので、それは将門記以来の軍記物語にみられる。

武士は死を日常の生活とするものである。死を恐れては生活できない。死をよろこぶことが、生活をたのしみ、義務を全うし、家名を挙げ名譽を永遠に高める所以である。死して本懐を遂げるとは、よろこんで死ぬること、怨恨なき死を果たし、美と死することである。かかる死を念ずる武士には、複雑な教義・物資と時間の多くを要する旧仏教よりも、平易な新仏教である法然・親鸞・一遍・栄西・道元等の浄土念佛宗と禪であった。中世が降るに従い、武士道が発達し、美の觀念と念死が弘通したことは、佛教の引導に因るものである。禪は中世後期の室町時代に至って、寂滅文化(念死道)(日本靈性・アライヤシキ文化)ともいべき極盛を表現した。平曲に語る祇園精舎の鐘の音がここまで鳴り響いている。

美とはいのちのたく豊けさである。秋冬を迎へた果実の美は、春夏に成熟したいのちである。美しく解脱・脱落するいのちの死の美は、生の時に美しく成熟する。生死一如である。承平・天慶・康和・保元・平治とうち続く、暴風驟雨の戦死は、王朝の油脂的実存を洗淨して、眞実・淨福を求める人間を生み出した。この人間の心は

念死、日本的靈性、寂滅的である。ここでは浄土と禪は融即してゐた。この中世文芸の基調は、生の現実の穢土の厭離すべきことを觀照するリアリズム。例へば方丈記・地獄草紙・病草紙・戦記文芸。これらは往生要集をつぐものである。この反面に超現実の死の世界を憧憬するロマンがあつた。この二面を調和する夢の浮橋の如き生死・明暗の間色美があつた。いのちを念じた文芸であつた。そのいのちは厭うべき生死無常のいのちであつた。この生死し、愛欲煩惱するいのちを彼岸に涅槃・寂滅せしめたことに、中世文芸の美があつた。いのちは時・歴史である。中世人の時と史觀を考察してみよう。

史觀 人間は死すべき存在である。死すべく生きている。生きるということは、死ということである。生の様式は万人万様であるが、死の一点は平等である。祇園精舎の鐘は、死は寂滅涅槃・大美であるぞと鳴っている。人界の虚榮をいそぎ捨てて、寂滅為樂に任せよと響く。これを応援したのが、末法史觀である。

補註 中村元・佛教語大辞典に、釈尊の入滅後千年・千五百年或は二千年を経過すると、仏説の通りに修行し、悟る者がなくなりそれから一万年間、教法のみが残るという。この一万年間を末法(正法絶滅の意)といい、經・律の中に教説されている。当時の信徒に危機意識を起させる為に説かれた。シナの文献でこの思想が現われたのは、北齊慧思の「南岳恩禪師立誓願文」が古く、ついで隋の信行は末法を第三階の時とし、佛教中の特定の二法によらず、普法(念仏教)を修行すべきであるとして、三階経を唱え唐の道綽・善導などは末法に相応する教えは、浄土教のみである

とし主張した。日本の源信・源空なども、これを受けて浄土教を鼓吹し、日蓮は「法華経」の題目を唱えることが、末法に得脱する唯一の道と論じて日蓮宗を開いた。榮西・源空・親鸞・日蓮など鎌倉時代の新宗派の祖師が依用した「末法燈明記」(伝教作)は、平安末期の偽作であるが、日本の末法思想を推進するのには、最も有力の著作であった。平安末期には、釈尊の入滅を紀元前九四九年(壬申)とし、正法千年、像法二千年とする説が行はれ、永承七年(一〇五二)に末法を迎えたとした。この年に長谷寺焼失し、武士の勃興・僧兵の横暴に替えた貴族は、浄土教に帰依して後世を願う傾向が著しくなった。

とある。往生要集には、冒頭に、「夫し往生極楽の条件は、濁世末代の目足なり」と、彼の浄土教立案が、末法の衆生を救うことにあることを明記している。

源氏物語には、帚木・若紫・賢木・松風・真木柱・藤惠葉・若菜・横笛・夕霧・幻・橋姫。手習に、すゑの世と出ている。源氏物語は入末法の西暦一〇五二(後冷泉永承七)より約五十年前の作品だから、末法の接近を惧れる不安感の末の世である。その不安は、前九年の役・後三年の役・将門の変・純友の変・保元の乱・平治の乱と次々の兵乱が起り、更に平家物語から承久の乱・元寇・南北朝の抗争・応仁の乱と、うちつづく白法隠滅・斗諍堅固の末法の症状が末の世という文字を使はなくても、現実の歴史的事実となつて人間を苦しめている。その歴史の渦中に、末法史観を論じたのは、天台座主慈鎮の「愚管抄」である。彼は藤原氏として天台の僧正として特異の末法史観を論じた。彼の末法とは、藤原氏の子孫である天皇

家に院政が始り、武士に圧迫される状態である。仏法ニテ皇法ヲバ守ラズレズ」末代悪世武士ガ世ニナリハテテ末法ニモイリニタレバ」と書いている。一切ノ法ハタ、道理ト云ニ文字ガモツナリ。其外ハ何モ無キ也。僻事ノ道理ナルヲ、知り分ツコトノ極マレル大ニテアル也。コノ道理ノ道ヲ、劫初ヨリ劫末ヘ歩ミ下リ、劫末ヨリ劫初ヘ歩ミ上ル也。と書いてあることから考えて、歴史哲学・道理想観ともいうべきである。末法の危機を超える道は、超歴史的な普遍的佛敎的道理であるとする論理である。法然は「念佛大意」に佛道修行ハ、能々身ヲハカリ、時ヲハカルベキナリ。佛ノ滅後第四ノ五百年ニタニ智慧ヲミカキ煩惱ヲ断スルコト難ク、心ヲ澄シテ禅定ヲ得ム事難キ故ニ、人多ク念佛門ニ入りケリ。則チ道緯善導等ノ浄土宗ノ聖人、此時ノ人也。況此比ハ、第五ノ五百年、闘諍堅固ノ時ナリ。他ノ行法更ニ成就セム事難シ。加之、念佛ニ於テハ、末法ノ後尚利益有ヘシ。況今ノ世ハ末法万年ノ始也。一念彌陀ヲ念ムニ、奈往生ヲ遂ゲザラムヤ。

と末法時の衆生往生の道は、念佛が最勝道であることを、懇切に説いている。親鸞は正像末和讃「釈迦如来かくれまし〜て。二千余年になりたまふ、正像の二時はおほりにき、如来の遺弟悲泣せよ。以下五十八首を作り、大集經にときたまふ、この世は第五の五百年、闘諍堅固なるゆへに、白法隠滞したまへり。像末五濁の世となりて、釈迦の遺教かくれしむ、弥陀の悲願ひろまりて、念佛往生さかりなり。等と歌っている。教行信証にも末法思想がみられる。日蓮の南無妙法蓮華経の題目宗も、法然の念佛義に倣つて、末法危機観から立案されたものである。道元は隋聞記第四巻に、

「末法なりと謂うて、今生に道心発さずば、何れの生にか得道せん。仏教に正像末を立てること、暫く一途の方便なり。弁道話には尚大乘実教には正像末法をわくことなし。修すれば、みな得道すといふと、末法史観に対して強く反抗している。彼は極めて時を大事とし、永平弘録第七卷に、「好箇時光、直須努力、時不待人、須教三頭燃」とあるが、その発心得道の時は、今という絶対現在の連続である。念々無常刹那消滅であるがゆえに、いそぎ行持得道せねばならぬ。則ち随聞記第一卷に、

「只念々に明日を期することなく、当日ばかりと思つて、後日はなはだ不定なり。知り難ければ、只今日ばかり存命のほど、佛道に随はんと思ふべきなり」とある。無常の時に流されてはならぬ。現在の今に佛道を行持せねばなりぬ。これが人間を超越する道である。行持巻に「一日はおもかるべきなり。いたずらに百歳いけらんはうらむべき日月なり。かなしむべき形骸なり。たとい百歳の日月は声色の奴婢を馳走すとも、そのなかの一日の行持を行取せば、一生の百歳を行取するのみにあらず、百歳の他生をも度取すべきなり。この一日の身命をとつべき身命なり。とうとぶべき形骸なり」と説く。円成した瞬間々々のいのちの美を説いているのである。道元もあはれ・かなしというている。末法の世の上求菩提のあはれ・かなしと下化衆生のあはれ・かなしであり、それは共に源氏物語等の悲観的が、希望ある意志的になつてゐるのである。道元はじめ仏教的偉人たちは、その変転を時の無常迅速に順応していそげと勤めてゐるのである。生の價値を無下に感じ、死の價値を無上と感じ、生きる管為を甲斐なく感じ、菩提の道を尊ぶのである。一言

芳談の「後世を思はむ者は、糖杖瓶一つも持つまじきなり」という、人生の物欲を捨てて「無きに事缺げぬやうに計りひ過ぐる、最上のやうにてあるなり」とう否定道は、顕性房の「我は遍世の始よりして、とく死なばやと云事を習ひしなり。さればこそ、三十余年間ならひし故に、今は片時も忘れず、とく死にたければ、すこしも延たる様なればむねつぶれて、わびしき也。(一言芳談)という死をよるこびいそぐことに共通する心理である。厭離穢土の極が欣求浄土という心靈的安樂死に直結してゐるのである。衣食住・愛欲名利を捨てる道と、生理的いのちを愛しませず捨てる道とは、自由に融通し、踊躍大歡喜してゐる。

解脱してゐるからである。その象徴的人物は、一遍上人である。捨てる道は、死を喜び死の絶対積極道を精進する道である。ここでは浄土も禪も一致している。諸縁を捨てる道は、貧・孤独・坐禪・旅となる。諸縁を絶ち無一物となる道である。生き乍らの死を歡喜する道である。生が解脱した自由な遊びの世界である。厭離穢土のあはれ・はかなしの感傷を円融した処である。佛教で僧侶の別名を貧道と称し、殊に仏心を最高價値とする禪では、懷昇の「正法眼藏隨門記」に、「僧は須く貧なるべし」と言つてゐる。一心・一念・一刹那・一隅・初発心の一に無我・空に、「無一物中無盡藏有花有月有樓台」と、一即多・無即有・微即顯・小即大・貧即富貴・悲嘆即歡喜と転進してゐるのである。

俗界の万事は、いそいで勝利する必要はない。負けてもよい。菩提の聖界に勝負はない。俗界の女性的柔弱を剛毅に鍛練したものが武士道であつて、聖界に勝負をもち込んで墮落させたものが僧兵で

ある。聖とは生きながら我欲に死する無我・空の勇猛な英雄である。いのちを惜しまず、名利を捨てた僧界の敗者である。世渡に下手な愚劣人である。死人となって生きる彼の世の人。往生人末期の人の目には、眼光を遮る我執の影も無く、事事物物の真実を写し、宇宙の調和を観、宇宙の旋律を聞く。調和とは無対立・無矛盾の即の世界である。吹く風・波の音・鳥の声も諧調している。恒常不斷に時間的空間的に、不思議の顯現する創造的進化界である。即ち往生人は詩人である。念々驚異を歡喜する人である。もののはれをしる人・祇園精舎の鐘の声を聞きうる人である。

はかなし 人生を消極的否定的に観ることは、はかなしがある。漢字で夢と書くのから見ても、人生を夢と観るのである。夢に寐てみるものと、現にあつてみるものと二つある。夢は超現実でたよりにならぬ。現を夢と観ることは、叡智ある人間のみ業である。大品般若経警品に、「智者は譬喩を以て解を得ん」とあり、法華経方便品に「我れ無數の方便、種々の因縁譬喩言辭を以て言辭を演説す」とある。大品般若経の十喻中に、維摩経方便品十喻中に、羅什訳金剛般若ハラミツ経六喻中に、撰大乘論の八喻中に夢を喩としている。夢を信する時、その人は詩人となる。平家物語作者は、人生を春の夜の夢の如しと横超達観いる。

横超達観とは、解脱・寂滅為樂のいのち、寂さびの美である。涅槃・安心・無為自然・安樂・大調和である。それは源氏物語の精神・光源氏の心の結果であった。それが秀でた文化として室町時代の連歌・能楽と茶道等に現れている。長い南北朝抗戦という王朝の式微を経て、人々は平安王朝の昔を回顧憧憬している。それと武士的・意

志的崇高な禪との調和した処に、室町文化が創造されたのである。源氏物語美の偏女性欠陥を禪によって補欠したのである。

横超達観とは、末法濁世の油脂的実存のかなしみ・あはれ・はかな・怒り・怨み・さみしさを逃避せず、包摂浄化恒転しているのである。宣長は「玉の小櫛」に、「人の情のさまざまに動くなかに、かなしきこと、うれしきことなどには動くこと浅し。悲しきこと、恋しきことなどには深し。故にその深く感ずる方を取り分きて、あはれということあるなり」といった。

さび 中世文化史の特質は、庶民文化の向上普及である。それを助けたものは、平等覺を説く佛教の力が大きい。庶民に愛好された平曲が語り出す涅槃経の寂滅為樂は、ほろび・死のかなしみとやさけさの平等を感動させて、山の奥・谷の底・海辺の果まで鳴り響いた。そして水苔のやうに、芽ぶき育ってきたのが、さびの美である。寂滅為樂の美である。山野に一日の労働を終った農人が聴く晩鐘の響が、寂滅為樂である。それは老朽する迄重い宿業を背負うて一生の勤苦をつづけた衆生が、臨終の夕の一念に聴く、来迎樂の鐘声と等しい。花をのみ待つらん人に山里の雪間の草の春を見せばや（家隆）つつましき・やすけさ・しづけさ、が寂である。さびは、しか（然）びである。然びは自然び、自然に順い・信まかせ・たのみ・つつまれる自然法爾の正直・素朴・やすけさが、さびである。歴史は民族の業道自然である。

源氏物語・新古今・俊成・定家・西行のあはれ・かなしみ・はかなも、平家物語の怒り、太平記の怨みも、連歌・能楽・俳諧・茶道の寂の中に、法然・親鸞・一遍・栄西・玄恵・道元・一休を介して

包み浄化しているのである。芭蕉がいみじくも、西行の和歌に於ける、宗祇の連歌における、雪舟の絵に於ける、利休の茶に於ける、その貫通するものは一なり。

といっているのは、芭蕉が中世の寂の大成者であることの自証である。これによって研究してみると、新古今や家隆・定家・連歌の正徹、心敬の幽玄からして、芭蕉のさびが流れ出ていることがわかる。芭蕉のさびは、その後の近世の近松・西鶴・歌舞伎・良寛・一茶の文芸美の旋律となつて流れて行く。遠く源氏物語の煩惱と菩提の調和、祇園精舎の鐘の声の余韻である。旋律と成ることは、宗教的のち、宇宙的調和に包まれているのである。

中世から近世文芸と祇園精舎の鐘の声の余韻。

能の道成寺 観阿弥・世阿弥合作、邪惡の炎を鎮めんが為に、

春の夕暮。来て見れば、入相の鐘に花と散りける。

さる程に、寺々の鐘。月落ち鳥鳴いて霜雪天に、満汐程なく日高の寺の。

とある。この晩鐘は終日煩惱に奔走した者の慰安。

欲楽の後の哀愁やがては、西方浄土を欣慕する。つまりは菩提心に誘ふのである。

菅原伝授手習鑑 浄瑠璃、延享三年竹本座初演、竹田出雲・並木千柳・三好松洛・竹田小出雲合作。

冥途の旅へ寺入りの、師匠は弥陀佛釈迦牟尼仏、六道能化の弟子となり、賽の河原で砂手本、いろは書く子はあえなくも、ちりぬる命、是非もなや、あすの夜誰か添乳せん、らむ憂い目見る親心の死出の山けこえ、あさき夢見し心地して、跡は門火にえひも

せず、京は故郷と立ち別れ、鳥辺野さして（第八幕目・寺子屋の場）

菅秀才の身代りとして死んだ小太郎の野辺の送りをする源藏夫婦の哀愁の語りである。

曾根崎心中 浄瑠璃、作者近松門左衛門、元禄十六年大阪竹本座に上演。

此の世も名残。夜も名残。死に行く身を譬ふれば、仇しが原の道の霜。一足づつに消えて行く。夢の夢こそあはれなれ。あれ数ふれば暁の。七つの時が六つ鳴りて残る一つが今生の。鐘の響きの聞きをさめ。寂滅為樂と響くなり。鐘ばかりかは。草も木も空も名残と。見あぐれば、雲心なき水のおと北斗は牙えて影うつる星も妹脊の天の涕河。

仮名手本忠臣蔵 寛延元年八月十四日初日の大坂竹本座初演の浄瑠璃。作者は竹田出雲・三好松洛・並木千柳の合作。元禄十五年十二月十四日の赤穂浪士四十七人の討入事件は、偶然いろはうたの数と同じであったことから「仮名手本」という外題をつけた。元禄という精神がゆるみ風俗の乱れた歴史を環境として「善有ありと雖も食せざればその味わいをしらずとは、国治まってよき武士の、忠も武勇も隠るゝに、例へば星は昼見えず、夜は乱れて颯わるゝ、例しをこゝに假名書の」と、書き出したこの浄瑠璃は、いろはうたの無常が儒教的な治国安民に転用されてある。

娘道成寺（京鹿子娘道成寺）

鐘に恨みは数々こざる、初夜の鐘を撞く時は諸行無常とひびくなり。後夜の鐘を撞く時は是生滅法とひびくなり、最朝のひびきは

生滅滅已、入相は寂滅為樂とひびくなり。

我も五障の雲晴れて、真如の月を眺めあかさむ（鐘供養の場）松本幸治作で、道成寺恋曲者と題して常盤津で謡ふ。

過重な宿業を背負うて生きる盲人は、敏感な耳のゆえに琵琶法師となつて、悲しい運命をうったえつつ、世のあはれみを乞うて渡世した。その物語の平曲の一声に、涅槃経四句偈を、包む祇園精舎の鐘の声を弾いたことは、声塵得道の意義寔に深遠である。いろは歌史については、書くべきことが多いが、紙数に制約されて、ここには書かない。（了）